
成り損ないと称されて

畠田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成り損ないと称されて

【Zコード】

N9725W

【作者名】

畠田

【あらすじ】

「クーラーと百万が欲しいから野球大会に出場するぞ！」

と我が部長様がまたしてもトチ狂つた行動に打つて出たこの夏休み面倒なことこの上ないと思いつつも従順に従つるのは部長富川の調教の賜物か…。

誰もがのんきに過ぎず夏の中、富川によつて安息の日々は失われる！

夏休み返上で初日（前書き）

フィクションです。

フィクションでなかつたら俺が驚きですね。
とりあえず、股間が寒くなるそんな季節。

皆さん風邪をひかないよう「お過ごしください」。

本当は縦書きがよかつたんだけど間違えた。

夏休み返上で初日

他の文系の部活動は皆、夏のまわに地獄のような暑さから自主的に休部という形になつていて、文系部の成りそこないである所の我が部活が生糞の部活動よりも活動的なことに疑問を抱く。

しかし抱いても暑さのせいで思考は回らない。何より田頃の活動内容とトチ狂つた部長の言動や行動に慣れ、染まり、溺れてしまつた俺が今さら思考を巡らせたところで何かしらの解決案が見つかるとも思えない。

そう認識したとき、嗚呼俺はもう来るとこまで来ちゃつたんだな、と溜息を吐き後悔さえした。

そんな様子を見ていた人物が、会議室で使われていた物を我が部長が窃盗もとい拝借してきた長机越しに話を振つてきた。

「ため息つくなよ、どうせやることなんてなかつたんだろ？」

山本だ。つい最近まで野球部所属で、特に良くも悪くもない顔立ちのくせに女子におもてになる山本だ。

「失礼な奴だな」

「なら何か用事でも？」

「・・・いいや」

あるわけがない。あるのならそちらの方を迷わず優先しているね。何も用事が無いからここに来たんだ。個人的には用事がなからうが訪れたくはないが、理由も無しに部長様の命令を無視すれば後々に何かしらのペナルティが待ち受けているのでそうするほかない。

山本は机の下へと身体を潜らせ持参したバックの中から飲み物を取り出す。

小型冷蔵庫でもあればキンキンに冷えた物を飲めるのだろうけどうちの部室にそんな便利なものはない。冷えた物を飲みたいなら売店のところに行くか自分の家で凍らして持つて来るかのどちら

らかだ。

そしてどうやら山本は後者のようで満足するまで飲み下した後はそれを頭へと当て温度差から来る清涼感を身体で実感していた。ちなみに冷蔵庫が無いことから察してくれたかもしだれないが冷房機、クーラーもない。他の部活は両方ともそろつているというのになぜ我が部活動だけは手配されていないのだろう?やはり文系部のなりそこないだからだろうか・・・。

いや、理由はしっかりと分かつてゐるんだけどさ。

そんな成りそこないの部の夏への対象法は窓と扉を全開にするという今となつては原始的なものであり風のない今日、効果はいま一つ。蚊が飛んでくるかどうかが心配になるがその点については我が部のしつかり者、西都崎という後輩女子生徒が蚊取り線香で対処済み。おかげで現在はかゆみの苛立ちもなく線香の香が漂つてゐる。「それより姿を見せない我が部長様は何のために俺たちを招集したんだ?」

「姿が見えないのは西都崎もそうだな」

入ってきたときから思つていたことだつた。俺はてつきりいつも通りにあの横柄な我が部長様が待ちかまえてゐるのかと予想していながら居たのはこの山本だけだつた。かといつてその部長と西都崎がここを訪れていないわけではないようで、いつも一人が利用している席に一人の鞄と思われるものが置いてある。

(つまり一度は訪れているということか)

山本も一人の行方は知らないようで俺が来た時と同様に既に一人の姿はなく荷物のみだつたといふ。

夏としては環境の悪いこの部室で特にやる「ことがない俺に山本が自身で持参していたらしいチエスを持ち出し一緒にやらないかと掛け合つてきた。

「いいけど、俺チエスなんてやつたことないぞ」

「別にかまわねえよ、やりながら教えるから」

そういうながら既にチエスの駒を盤上に並べ始めている山本。そ

の様子から恐らく俺が断つてもこの暇な時間を過ごしたくがないために何かしらの言葉を並べ俺を言いくるめる気が満々だつたのだと思える。

まあ俺だつてこの暇な時間に汗をただ流し過ごすなんて堪えられなかつただろうから別にかまわないさ。

そうしてチエスを山本と交え約一時間。夏の太陽は一層高く昇り、蝉の鳴き声は雨のように降り注ぎ、蚊取り線香の灯が半分を侵食し五戦目となるチエスの指し合いを俺の五度目の勝利で収め本当にこれが山本のチエス盤なのかと疑問が沸き出てきた頃、開け放たれた扉の向こう側つまりは廊下の方からドタバタと聞き覚えのある力強い足音がこの部室へと向かい近づいてきた。

敗者である山本が駒を並べるのをすぐさま止め、俺と同じくそれを向かい入れる準備をする。準備とはいってもただ扉側に体を向ける程度の事だけ。自然とそれを行つてしまふのは我が部長様の調教の賜物だろう。認めたくはないがな。

足音が最大となつたと同時に声が轟く。

「遅れてごめん！」

謝罪の言葉とは裏腹に満面笑みのその顔に詫びの情緒なく姿勢は平身低頭とは行かずむしろ片手を上げ友達に挨拶するように手を上げているといふもので、実際友達なのだから礼儀だと遅れてきたのだからもう少し態度を改めたらどうなのだとか言うべきでないのかもしれないが親しき仲にも礼儀ありと言葉があるように親しい仲にも礼儀は必要。よつて遅れて来たこいつの態度は不道徳なもので文句は当然。

短髪というよりショートカットといったほつがニコアンス的に合つてゐる長さで地毛の金髪頭、校則違反のはずであるピアスを身につけている身長158センチ、体重不明、胸は目測Bカップギリギリ、右利き右投げ、好きな言葉は〇〇〇の我が団長様、宮川ユリに文句を言ってやつた。

「本当に悪いと思つてゐるのか？一時間も待つてたんだぞ」

届いた文句はどうも悪い所へと届いてしまつたらしく部長様は気にくわないとばかりにあつといつまに不機嫌な表情へと変わつてしまつた。

「何？文句あるの？分かつてないようだから言ひナビ私たちは今グラウンドで声を張り上げている野球部が練習を始めた頃から居たんだから本来遅れているのはそっちなの、だから謝らないといけないのはお前の方」

「ならどうして謝つたんだ」

「私が謝つたのは山本に対しで、お前じやねえよ」

「ほ、ほう」

中々癪に障る事をいいやがるこの女。何より待たせたのは山本もだろうが。

差別反対！

「西戸崎の奴はどうしてるんだ？」

俺とは全く違う事を気にしている山本が話に割つて入る。

「楓か？楓ならもうすぐ追いついて来るはずよ」

話の筋と先ほどの足音から推察するに全力で走ってきたこの部長に西戸崎は付いてこれなかつたのだろう。

「ここで俺たち一人は何処に行つていたかとは聞かない。必要な事なら勝手に富川が口を開きペラペラと喋り始めることを知つていたからだ。同じく今日俺達が呼ばれた理由ももう聞もなくこいつが熱弁してくれるだろうからそれも聞かないし訪ねない。

汗だくの富川は山本が片手に持つている氷漬けのペットボトルに目をつけ喉を潤そと手を伸ばす。山本も拒むことなくそれを受け渡し富川は喉を潤すことができ満足気。

その光景を見ていのとつい先日、学校が夏休みへと入る少し前のこと記憶に蘇る。今日のように暑いあの日、凍つてゐるわけでも冷たいわけでもないスポーツドリンクを汗だくの富川に分け与えてやろうと思つたんだが富川はそれをありえないとばかりに完全に拒否。

体の部位全てを使い全否定。どうしてそこまで嫌がるのかと訊ねてみればお前が口にしたものなんて飲みたくないとの事だった。一年以上の付き合いとなるにもかかわらずそこまでの信用を勝ち得ていらない事にショックが大きく俺はその後しばらく棒立ちの状態での場を過ごした。その後の富川はとすると俺と全く同じスポーツドリンクを他の生徒の下へ貰いに走つていった。

本当に『俺の物』が駄目なのか、とあの時は相当なショックで翌日もこいつに顔を合わせるのが怖かつたな。

「すみません遅れました」

とここで先ほどから会話にちらほらと出てきていた後輩一年の新人西戸崎が登場。こちらは富川とは違い平身低頭、謝罪の意を露わにした態度であった。

相変わらずいい子だ。

息が荒れている彼女に山本が再び飲み物を渡そうとするが持参しているから結構と断られた。何気ないようなやりとりだが個人的には嬉しい出来事である。

「さて、そろそろか」

西戸崎はもう既に事の内容を知っているかもしれないが俺と山本は知らない。

「ふふん、そうね」

金髪女の富川は右手人差し指だけを立てて左右に振りながら皿邊げに語り出す。

「私たち部活動は他の部活動と同等の扱いをなぜか受けておりません」

なぜかつて、本来は3年の同好会期間を経て正式な部活動へとなる所を八方手を尽くして、生徒会や校長を言いぐるめ創設わずか三ヶ月で正式な部へと昇格した俺達団体だ。そんな迷惑極まりない撃破りな連中が行う部活動にタダではないクーラーや冷蔵庫を他の部室にはあるからといって配給しようなんて思わないさ。世間からは活動内容から文芸部のなりそこないとまで言われているしな。とい

うか部活動費用は回してくれていいのだからむしろ感謝するべきだ。

問題点については考えれば考えるほどこちらの非であることが分かること、このように我が部長様はどうも生徒会側に問題があると感じているようだ、続く言葉は生徒会への辛辣なコメントだった。

「我が部がまだ同好会だった頃、我々の輝かしい功績のあまり、あの禿げズラ校長と生けすかない眼鏡会長が正式に部へと昇格したもののそれは世間からの批判の言葉を怖がつての処置がありました。実際はこの様に夏場は窓を開け蚊取り線香を隅におき蚊の脅威に怯えながら過ごしていく、冬は窓を閉めても隙間風が酷く我々は絵画の前で倒れた少年と犬になる寸前であります」

演説風、ではなく本人にとつてはまさに演説であるだろう話の中には虚構と事実が入り混じり山本と俺の脳が事実確認に追われる始末となつていて。西戸崎はこの部室で未だ過ごした事のない未体験の冬の話に不安の顔を見せて自分にも関係がある話なのだと実感したのか真剣に話を聞いている。西都崎の反応からここで招集された理由を聞かされていないのだと察した。

俺たち三人はそういう状態に追いやられながらも歩みを進める部長に寸分狂わず体を回し常に正面を向ける。

やがて、二つ同じものをつなげた長机の奥にある愛用の椅子の前へと立つと富川コリはこの後、今年の夏で恐らく最も身の程を知らない発言をすることになる。

「このままでは我が部が存続しても我が部員は皆天国へと旅立ってしまう恐れがあります。生徒会に救いの手を求めて差し伸べられるわけもない。我々は見捨てられたのです！ならどうするか！はい、

キヨウカ」

振られていた人差し指で指される俺。

俺たちが天国へと召された時点で恐らくこの奇怪な部なんて継ぐ者などいないのだから十中八九廃部なるに決まっているではないかとか、そんなに設備を充実させたいのなら部活費用として支給されている生徒会からの金を貯めるなりすればいい等といったツッコミ

が出来ないほどの急な展開に戸惑つたが必死に回答を思案した結果この部長が言いだし、そなたな答えを一つ導き出した。

「自分たちで何とかする」

「正解！」

両手で大きく柏手かしわでを一つ。

パン。

「そう、救いの手が無いのなら自分たちでどうにかしなくちゃいけない！」

火がついた宮川の演説を止められるものが居たら見てみたいね。「そう思った私の下へある吉報が舞い込んできた！」

「吉報？」

西戸崎のその疑問に対する答えがこの夏もつとも馬鹿で愚かな発言であり、俺達部員メンバー以外までもがこの夏の数日間を無駄に過ごす原因となる。

「晩夏商店街主催の野球大会。参加者不問、必要人数は11人、そして景品はクーラーと百万円の豪華な品ぞろえ！」

「おい、まさかお前」

嫌な予感がした。とてつもなく嫌な予感がしたんだ。宮川にとつて吉報であるかもしけないが俺たちにとつてもそれが吉報であることは限らない。むしろこいつがやること成す事は俺たちにとつては凶報な事ばかりだ。

だから問い合わせたというのに、こいつは聞く耳を持たない。

分かっているさ、そんなことは部員第一号であるこの俺が一番よく理解している。

我が部長様は

「我が部は持てる限りの全勢力と力でこの大会に参加し優勝します！」

身勝手で大馬鹿なのだ。

夏休み返上す初日（後書き）

御田を汚してすみませんでした。
また拝読ありがとうございました。

夏休み返上す初日（前書き）

続き。書き直す可能性大です。

夏休み返上す初日

「とりあえず、青木は外せないな」

「ああ」

「そうですね」

冒頭からいきなり三人の信頼を一身に集めてしまった青木という人物は運動神経抜群の女の子で気さくで誰に対しても優しくて誰に対しても悪評ない（言いすぎだが）人間としては勉強面以外では凄く出来上がっている人物である。

その出来た運動超人青木の名が今この場にて挙がったのは、部長の宮川様からの命令が原因だ。いや、原因というならこの時期に球技大会を開催すると言いだしたこの土地の御先祖様が原因か？まあどっちでもいいが、兎にも角にも部長様の「メンバーを集めろ」という命令が無ければ青木の名は挙がっていなかつたろう。

球技大会参加に必要な人数は十一人となつていて、野球をするだけなら九人だけでいいのだけれどもし試合の途中何かしらの形で退場などした場合九人だけでは穴が空いてしまう。その穴を塞ぎ、試合を滞りなく終了するための補欠一人追加の十一人というわけだ。

ここいらの地域が参加する球技大会のこのルール。それはある程度の人数が既に揃っているチームには嬉しい好条件だろうが成りそこないで部員数が少ない俺達にとっては、ただただ、苦しい悪条件である。

その悪条件に対して必死に考え巡らせている部員の中に宮川の姿はない。

本人曰く、

「外に出て有望そつなのスカウトしていくる！」

とのことだ。

言つておくがこんなことは止めると俺はしっかり進言したんだからな。

「どうだ？ 部長本当にスカウトしてくると思つか？」

「分かんねえ、やりそうな気もするけど」

宮川が誰かをスカウトするわけないと思いながらもなんだかんだで
アイツならやりかねないだろうなとも心のどこかで期待を寄せて
いる自身が嫌になる。

「まあともかく俺達四人と青木で五人集まつた。あと六人必要だが
他に当てがある奴はいるか？」

山本の投げかけに俺も西戸崎も首を横に振る。

「ま、そういうな。ちなみに野球部も甲子園に向けての練習で手
一杯だから無理だ」

「わかつてゐよ、そのぐらい」

山本は元野球部だったからその手の連中を勧誘できただろうが時
期が時期の為仕方が無い。

時期という点においては山本が言つ野球部だけではない。他の運動部もまた同じく大会が控えている。帰宅部の連中もまだ夏休みも始まつたばかりだというのに早々にこんな馬鹿げた事に呼び出されたりなどしたくないだろ？

俺は、HRで配られたプリントの裏に候補者欄と書き青木の名を付け足した後現在の困窮の思いを露わにする形で鉛筆と紙と共に机に放り投げる。

鉛筆はカラカラと転がり木製の乾いた弾んだ音は夏の部室のこの場では意外と相応の音を奏で風鈴と同等の涼しさすら感じさせた。
あー、と背もたれに体重をかけ椅子が鳴き始めたのにも構わず更に首を後ろに垂らしうな垂れる。

が、すぐさま元の姿勢へと戻した。

皆必死に考えている中なのに軽率な行動をとつてしまつたと思い直
したからだ。

二人から非難の目が向けられているだろ？と予想し身構えてしまつたのだが驚いた。西戸崎も山本も俺と同じように後ろに首を傾けうな垂れていたのだ。

その姿を視認して再度俺は体を反り嗚呼、と溜め息とも嘆息ともつかぬ声を挙げた。

「本当にどうして俺たちはアイツについて来たんだろうな」

「わかりません」

「俺は脅迫されたからだ」

ぎい、とパイプ椅子が更に鳴く。

「友人知人のあてがない、あつたとしても望み薄」

「それこそ部長がスカウトで人を連れてくるか来ないかと同程度のな」

「でもだからと言って私たちは」

「そうだからと言つて、俺たちは。」

「幾ら当てが無いと言つても」

「見込みがなかろうと」

「脆い頼みの綱だろうと」

「「「我が部長様の頼みは聞かなければならぬ」」

三人は三人とも一斉にパイプ椅子を泣かせ体を起こした。
線香の香りが鼻をつく。

西戸崎は笑い、山本は相変わらずの無表情だが嬉しそうに見える。
俺はと/or/、

「片つ端から呼びかけるしかないか」
やはり、大きく溜め息をついた。

夏休み返上す初日（後書き）

相変わらず糞？

煩いよ！でもそういう感想もバシバシ募集中！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9725w/>

成り損ないと称されて

2012年1月14日19時51分発行